

# Copy Formation と外置構文

大塚 知昇  
近藤 亮一  
田中 祐太  
菅野 悟

## 1. 外置構文の下位分類

Kondo (2015) や Napoli (1988)等は外置構文を二種類に下位分類している。両構文では用いられている述部が異なっていることに注目したい。本研究では Kondo (2015)にならい、(1a)を Type I E(xtraposition) C(onstruction)、(1b)を Type II EC と呼び、これらの構文に関連する現象に説明を与えることを目標とした。

(1) a. It is obvious that the world is round. (Akmajian and Heny (1975: 280))

b. It seems that Ralph already skimmed the milk. (Napoli (1988: 326))

これらの二種類の外置構文は、wh 抜き出しの可否、文主語構文への変形、PRO のコントロールの可否、Theta 役割の有無に関して異なった振舞いを示す。

(2) a. \* Why<sub>i</sub> did it seem miraculous that John left t<sub>i</sub>? (Stroik (1996: 249))

b. How<sub>i</sub> does it appear he got lost t<sub>i</sub>? (Zaring (1994: 566))

(3) a. [That the world is round] is obvious. (Akmajian and Heny (1975: 280))

b. \* [That Ralph already skimmed the milk] seems. (Napoli (1988: 326))

(4) a. It<sub>i</sub>'s likely enough that John did it [PRO<sub>i</sub> to convince me we ought to question him].

b. \* It<sub>i</sub> seems enough that John died [PRO<sub>i</sub> to upset me]. (Napoli (1988: 238-329))

(5) a. We all watched it become clear that he wasn't going to show up at the church.

b. \* I could actually see it appear that he was sad. (Napoli (1988: 337-338))

また Type I EC については、一致の特殊性と、文主語構文にしたときの that の省略の不可能性という興味深い事実も存在する。

(6) a. \* It seem equally likely at this point that the president will be reelected and that he will be impeached.

b. It seems equally likely at this point that the president will be reelected and that he will be impeached.

(McCloskey (1991: 565), 下線のみ追加)

(7) \* The teacher was lying was hardly obvious. (Stowell (1981: 396))

## 2. 理論的枠組み

大塚 (2021)は、Chomsky (2021)で議論された Copy Formation に基づく Control 構文への説明を修正し、義務的 Control 構文において Copy Formation の対象となるのは、先行詞の名詞句と pro であると論じた。

(8) a. John tried/wanted/hoped PRO to leave early.

b. [John ..... [pro to leave early]...] (Independent External Merge + Copy Formation)

さらに、この pro は格付与の有無に伴い、音声的に具現化される場合とされない場合があり、されない場合が義務的 Control 構文の空主語 (PRO)、される場合は pro の置かれた状況により Anaphor や Bound Pronoun として具現化されると主張し、これらの構文や現象を一括してとらえる可能性を提示した。

ただし重要なことに、大塚 (2021)の提案ではコピー関係を結ぶ要素 XP が上位に、pro が下位に位置した状況しか考察されていない。理論上は、コピー関係を結ぶ要素 XP と pro が存在する状況において、XP よりも pro が上位に存在する可能性((9b))も考える必要があるはずである (この点をご指摘いただいた南山大学の林慎将氏にはこの場を借りて感謝の意を表したい)。

(9) a. 大塚 (2021)の説明対象 : [ ... XP ... pro ... ] b. 議論されていない可能性 : [ ... pro ... XP ... ]

本研究では、(9b)の残された可能性が外置構文の性質の説明につながると提案した。詳細を考察するにあたり、Copy Formation と Labeling は Minimal Search に基づくことを思い出したい (Chomsky (2013, 2021)参照)。

これらを踏まえ、本研究では(10)の提案を行った。

(10) 提案 : Labeling と Copy Formation は並行的に生じる。

ここで提案する内容は、Labeling と Copy Formation がそれぞれ独立した別の操作として順に生じるのではなく、両過程が同時並行的に生じるというものである。この想定のもと二つの論理的可能性について考察したい。

(11) a. [ ... XP ... pro ... ] (=9a)

b. [ ... pro ... XP ... ] (=9b)

まず(11a)の状況であれば、上位の、先行詞の候補である XP が関わる Labeling が最初に起こり、次に XP と pro の間の Copy Formation が生じることになる。そのため、下位の pro が Labeling に関わる際には、すでに XP の copy とみなされていることになる。一方で(11b)の状況では、まず先に pro が関わる Labeling が起こった後、pro と XP の間の copy 関係が結ばれることになる。

言いかえると、(11b)において、pro は解釈上は XP と同一の要素とみなされるものの、統語上では copy としてみなされる前に Phi 素性を欠いた要素として Labeling に参加している。そこで以下の想定を追加する。

- (12) Copy Formation を受けない pro は T に default の Phi 一致を導き、自身は it として音声的に具現化する。

最後に本研究では、両構文に対して以下の想定を行った。

- (13) Type I EC では D を主要部とした D-that 節、Type II EC では通常の CP 節が選択される。

Copy Formation が DP 同士の間で生じると仮定すると、(13)の想定から、Type I EC では、D 主要部の存在により pro と D-that 節との間に Copy Formation が可能であると予測される。一方で Type II EC では、CP 節に D 要素が存在しないため、pro と CP 節の間には Copy Formation が不可能であると予測される。本研究ではこれらの想定により、1 節でみた二種類の EC の非対称性が説明されると主張した。

### 3. 議論の拡張

最後にここでの分析を拡張し、両構文での that 節の範疇の違いが like 節にも見られると主張し、Copy Formation を用いた Copy Raising 構文の説明を試みた。Copy Raising を許すのは、Type II EC に対応する場合のみであり、Type I EC に対応する構文での Copy Raising は不可能である。

- (14) a. It is obvious that the sun rises in the east.      b. \* The sun<sub>i</sub> is obvious [like it<sub>i</sub> rises in the east].

- (15) a. I seems like syntax is interesting.                      b. Syntax<sub>i</sub> seems [like it<sub>i</sub> is interesting].

(Landau (2011: 803))

本研究では、Copy Raising は主節主語と埋め込み節内にある同一指示の代名詞の間に Copy Formation が適用されることにより生じるという想定と、以下の追加の想定を行うことで、上記の対比の説明を提示した。

- (16) 想定：Copy Formation にはある種の A-over-A の制限が働く。

本研究で提示した議論に基づくと、(14)の埋め込み節は D 要素であるということになる。そして(16)を踏まえると、(14)の主語 the sun が D 要素である節を超えて内部の D 要素である it と Copy Formation を行う場合、D 要素を超えて D 要素と関係を結ぶため、A-over-A の制限に違反する。一方(15)は Type II EC に対応する構文であり、埋め込み節補部は CP 節であると考えられる。その場合、主語 syntax が CP 節を超えて内部の DP である it と Copy Formation を行ったとしても、(16)には違反しない。

以上の議論により、本研究の枠組みで Copy Raising の例を説明できる可能性を提示したが、Copy Raising は埋め込み節が like に導かれている場合に限られ、以下のように that に導かれている場合は容認されない。この点は今後の課題として残すこととなった。

- (17) \* John seems [that he is a clever guy].

(Landau (2011: 796))

### 参考文献

- Akmajian, Adrian and Frank Heny (1975) *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.
- Kondo, Ryoichi (2015) "Two Types of Extraposition Construction in English," *English Linguistics* 32, 346-356.
- Landau, Idan (2011) "Predication vs. Aboutness in Copy Raising," *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 779-813.
- McCloskey, James (1991) "There, It, and Agreement," *Linguistic Inquiry* 22, 563-567.
- Napoli, Donna Jo (1988) "Subjects and External Arguments: Clauses and Non-Clauses," *Linguistics and Philosophy* 11, 323-354.
- 大塚知昇 (2021) 『MTC、MTB と Copy Formation』, 日本英語学会第 39 回大会ワークショップ発表.
- Stowell, Tim (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Stroik, Thomas (1996) "Extraposition and Expletive-Movement: A Minimalist Account," *Lingua* 99, 237-251.
- Zaring, Laurie (1994) "On the Relationship between Subject Pronouns and Clausal Arguments," *Natural Language and Linguistic Theory* 12, 515-569.